

たとい我、仏を得んに、国の中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば、正覚を取らじ

(仏説無量寿経巻上 聖典十七頁)

今ここで救われる

第六組 惠光寺

酒井 智

text by Satoshi Sakai

以前、ご門徒さん宅で勤まった年忌法要のお斎の席で、「こんなに科学や医療が進歩した時代に、今さら仏教でもないでしょう。」また、「こんなに若い私に、まだお寺など必要ありません。まだまだ死ぬことなど考えたこともありません。そんな私が、なぜ仏教の話を書かなければならないのですか。」と発言された方がおられました。私はこのような発言を、仏教は現代人にとって必要のないものであると言われているように感じたのです。きっと多くの方に、浄土真宗は死後について説く宗教であるという強い思い込みがあるのではないのでしょうか。しかし親鸞聖人は、今ここで救われるということに重きを置いたのです。親鸞聖人の宗教は死後のための宗教ではなく、今現在にはたらく宗教と言えるのでしょ

即得往生という言葉があります。親鸞聖人はこの言葉について次のようにお示しく

即得往生は、信心をうればすなわち往生すという。すなわち往生すというは、不退転に住するをいう。不退転に住すというは、すなわち正定聚のくらいにさだまるとのたもう御のりなり。これを「即得往生」とはもうすなり（唯信鈔文意 聖典五四九～五五〇頁）

即得往生とは、信心をいただければ命終わることを待たずして、そのまますぐに浄土に往生が定まるということで、不退転の境地に住むということなのです。不退転とは退かないことであり、賜った人生を生き切ることと言ってもよいのではないのでしょうか。

正定聚とは、往生が定まり必ず仏に成ることが決定している人々を指しています。聚とはなかまという意味があります。

即得往生こそすべての人が救われる道であり、その往生とは命終わってあの世へ行くことではなく、正定聚の人となることを意味しているのです。

眞実信心うるひとは すなわち定聚のかずにいる

不退のくらいにいりぬれば かならず滅度にいたらしむ（浄土和讃 聖典484頁）

この和讃は阿弥陀仏が人々に向けられた、第十一願（必至滅度の願）のところが詠まれています。もともと正定聚とは、凡夫が命終わり阿弥陀仏の浄土に往生すると、ただちに正定聚に住し、そこ

で修行して仏になるという場であると言われていたのでしょうか。しかしこのような理解に対して親鸞聖人は、この土で真実信心を得れば、ただちに正定聚の位につき、その後必ず滅度に至るとただかれたのです。今ここで正定聚の位につく、すなわち救いが決定するということから、現生正定聚と言われているのです。死後の救いから、救いは今ここで、という方向転換を成されたのが親鸞聖人の仏道なのでしょう。

第十一願に誓われる正定聚の位とは、阿弥陀仏の教えに生きる者の世界であり、阿弥陀仏の教えに導かれ、老病死などのさまざまな苦悩と共に生きるということです。決して苦悩がなくなることはありません。実は苦悩が私を育ててくれるのでしょうか。現生正定聚の教えは浄土真宗の教えの要であり、それはさまざまな苦悩と共に生きることによって、私自身のありように目覚め、阿弥陀仏と共にこの土を生き抜くということなのでしょう。念仏申す者は、決して孤独ではないのです。